

○帰化植物ノート (4)* (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: Miscellaneous notes on the naturalized flora of Japan (4)*

筆者は昨年8月から12月まで、欧米諸国を訪れる機会を得、その折、彼地の主なハーバリウム及び植物園等で、いわゆる weedy species を生品と腊葉との両面から詳細に観察、検討すると共に、我国で披見することが出来なかった多くの貴重な文献を閲覧あるいは入手することができた。そこで以下、この際に得られた資料をもとに、我国へ侵入した外来品について知見を述べてみたいと思う。

なお、今回の海外の諸関係施設での調査、研究に当り、種々ご配慮ならびにご援助いただいたニューヨーク市立大学教授兼ニューヨーク植物園主任研究官小山鐵夫博士を始めとする諸関連機関の curator 諸氏に対し、深甚なる謝意を表すると共に、長年にわたり筆者の調査、研究に常にご理解あるご援助を賜っている東邦大学名誉教授久内清孝先生、東大の原 寛名誉教授を始めとする関係者各位に対し、厚く御礼申し上げたい。

6) マルバクマツヅラ (新称)

かつて筆者が東京都内の外来雑草のフロラを調査中、品川区内の荒蕪地でオトメセンダングサ (植研 47(4): 119-120, 1972) と共にクマツヅラ科の一植物を採集したが、検定はそのままになっていた。ところで今回、種々検討の結果、これが北米合衆国原産の *Verbena stricta* Ventenat であることが判った。

本種は多年草で単一直立するが、上部で多少分岐し、通常 50 cm 許であるが 1 m 内外にもなる。全株、白色の粗毛を密布し、ピロード状を呈する。葉は対生、短柄を有し、卵円形で 5 cm 内外、葉縁に粗鋸齒をもち、先端は鋭り、葉裏に白軟毛を密布する。初夏から秋にかけて上部の葉腋から穂状花序をなし、無柄の小花を多数つける。花は本属の近似種と同様に下部より順次咲きはじめ、萼は筒状で 5 mm 許。花冠は5裂、平開し、花筒は長く、上部で曲り、有毛。花冠は通常、淡青紫色 (form. *stricta*) を帯びるが、今回の筆者の採品は白色に近いものであった。この点、原産地でも花色によって種々区別されており、form. *albiflora* Wadmond (シロバナマルバクマツヅラ) に当るものであろう。なお因みに淡桃色花をつけるものは、form. *roseiflora* Benke (トキイロマルバクマツヅラ) と呼ばれている。

原産地の北米合衆国では、南部とロッキー山脈を中心とする地帯を除く地域に広く分布し、またカナダの一部にも生育する。本種は彼地の路傍、荒地、原野、牧場などの乾燥地に生育するもので、従って上述の原産地での分布をも考慮すると、我国の気候条件にかなり適合しており、恐らく今後、広く各地に帰化する可能性がある。同学諸氏の注意を望みたい。

* (3): 本誌 48 巻 3 号 67-72 頁。Continued from Journ. Jap. Bot. 48(3): 67-72, 1973.

7) タバコ属の一外来品

数年前から本郷の東大理学部植物学教室に隣接する東京大学総合研究資料館の周囲の荒地に、写真のような変ったタバコ属の一種が生じている。本種については、既に原 寛博士が *Nicotiana trigonophylla* Dunal in A. De Candolle, Prod. 13(1): 562, 1852 と検定、筆者に提示されていたものである。現在のところ他に帰化した例を聞かないが、本属の帰化は珍しいものである故、一応記録しておく。恐らく、他の標本や資料などに混じってもたらされたものではないかと考えられるが、その生育ぶりをみると、今後、我国各地に野生化する可能性を十分に有するものと思われた。

本種は全草が淡緑色を呈し、Fig. 1 のように直立、多少分岐する1年草（原産地では多年草にもなるという）で、草丈 1 m 内外にも達する。全株に本属特有の腺毛を密布するため粘着する。葉は互生し、栽培品のタバコに較べて質が薄く全辺。下部の葉



Fig. 1. *Nicotiana trigonophylla* Dunal in full bloom, on open waste site around University Museum, University of Tokyo, Hongo, Tokyo. (Photographed by Y. Asai on Jun. 20, 1972.)

は葉柄を有し、披針形状乃至へら形で幅 1~4 cm, 長さ 5~15 cm 許。上部のものは披針形あるいは卵状披針形状を呈し、多少茎を抱脚する。茎の上部に総状花序をなし、多くの花をつける。萼は卵状鐘形をなし 1 cm 内外で、先端は 5 裂し、外面に腺毛を密布する。花冠は筒形で 2 cm 内外、淡黄緑色を呈する。蒴果は卵円形で多数の赤褐色の細種子を含む (Fig. 2, 3 参照)。

本種は、北米合衆国のコロラド州からネバダ、テキサス及びカリフォルニアなど諸州の砂漠地帯、特に河川の流域に分布するものの由で、米名を Desert Tobacco と言われる。よって和名は、アレチタバコと呼んでおきたい。本種を記録するに当り、種々ご教示いただいた原 寛博士を始めとする関係者各位に厚く御礼申し上げます。

8) ワタゲハナグルマ (新称)

かねて三重県の帰化植物研究家である太田久次氏から検定を依頼されていたものの中に、キク科の一外来品がある。本種は一見して園養品のガーベラに似た草姿を有する柔軟な小形の 1 年草である。葉は淡緑色で全て羽状に深裂した根出葉からなり、裏面に白軟毛を密布し、5~30 cm 許にもなる。夏から秋にかけて、葉柄よりも長い葶 (赤褐毛を密布する) を抽出し、1.5~3 cm 許の舌状花をつける。舌状花片は 15 内外で鮮黄色を呈し、中心部は淡黄色、裏面が黒色をおびる。

ところで昨年、筆者は本種をヨーロッパ各地の植物園で生品と標本とについて比較、検討した結果、これが *Arctotheca calendula* (Linn.) Levyns であることを知った。本種は美しい園芸植物の原産地として夙に著明な南アフリカの原産で、Cape weed あるいは Cape dandelion と呼ばれ、現在、ポルトガルやオースト



Fig. 2. Flowers of *Nicotiana trigonophylla* Dunal (Photo taken in the same site as Fig. 1.).

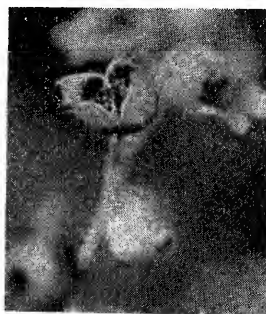


Fig. 3. Capsules with matured seeds of *Nicotiana trigonophylla* Dunal.

ラリヤなどに広く帰化し、耕地や路傍の荒蕪地、裸地、牧場等に生育している。またヨーロッパ各地にも栽植され、気候などの環境条件によっては越年草にもなる。

なお三重県のは、該地の随伴帰化種などの状況から、恐らく二次的な生育地であるオーストラリヤからの渡来品であると考定される。和名は最初、アフリカタンポポやヒメハナグルマなる名を考えたが、しかし上述のものの方が、より適切に本種の草姿を表わしているとの同学諸氏の意見を考慮し、この名を提唱することとした。

9) セリ科の外来品ゴウシュウヤブジラミ (新称)

最近、羊毛の輸入に随伴して、これの主な産出国であるオーストラリヤを原産とする種々な雑草の侵入が認められる。これら雑草の特徴として、一般に蒴果などが長い嘴状を呈したり、顕著な毛状突起あるいは鈎状の刺等を有し、羊毛に捲きつきやすい形状を具備したもの (例えば *Erodium*, *Medicago*, *Xanthium* などに属するもの) が多い。ここに記録する一品も、この範疇に属するもので、前述のものと同様に三重県下の楠町で太田久次氏の採集に係る。

本種は Fig. 4 のように有毛小形の 1 年草で直立し、時には横臥する。葉は 2 回羽状複葉をなし、根出葉と下部のものは長柄を有するが、上部では短かく、いずれも抱脚 (茎) する、葉腋より長柄を出し、茎頂に繖形花序をなして 5~10 内外の細花をつける。果実は卵円形で剛毛を有し、長さ 5 mm 許。

筆著は最初、本種の標本を手にした時、*Daucus* 属に近縁のものと考えたが、しかしこの仲間は多くの種を含み、検定に困難を感じたので、昨年、渡米の折カリフォルニア大学にセリ科の専門家である Lincoln Constance 博士を訪れ、直接検定を願ったところ即座に *Daucus glochidiatus* (Labill.) Fischer et Meyer (= *Scandix glochidiata* La Billardiere) と教示された。

本種はオーストラリヤの温帯に広く分布し、種々の地方変異も知られている由であるが、ここでは細かい点までの言及は避けたい。恐らく本種は、現在のところ temporarily naturalized plants の域を脱しない存在にすぎぬものと思われる。

なお和名は、本種の英名 Australian Carrot に因みゴウシュウニンジンとでも呼びたかったが、しかし上掲の名の方がより適切と思われたので、これを選んだ。

10) オニノゲシについて

オニノゲシ *Sonchus asper* (L.) Hill, Herb. Brit. 1: 47, 1769—*S. oleraceus* L. var. *asper* L., Sp. Pl. 794, 1753. は、従来ヨーロッパ原産であるとされているが、しかし現在ではいわゆる cosmopolitan weed として知られ、我国へは明治中頃に侵入、帰化したと言われている。このような古い渡来種で、現在、全国的な広分布を来したものは、原産地と同様に種々の種内変異を示すものである。本種も各地のものについて詳細に観察すると、可成り明瞭なものに腺毛の有無が認められ、ちょうど同属のハチジョウナとタイワンハチジョウナのそれと同様である。

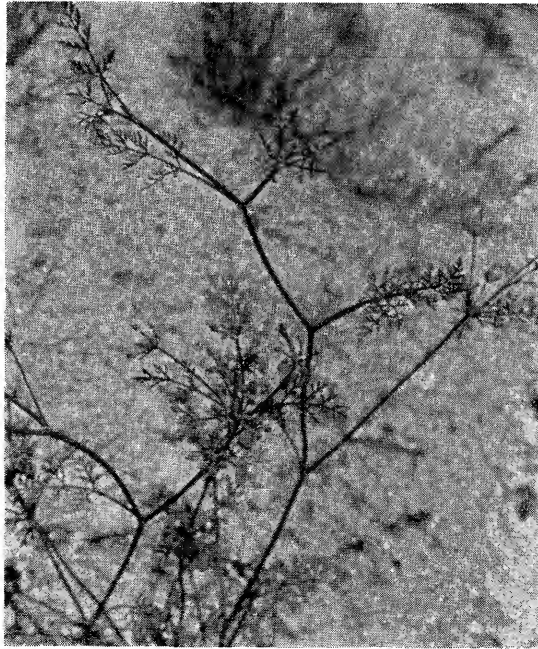


Fig. 4. *Daucus glochidiatus* (Labill.) Fischer et Meyer, upper part of a plant, in the waste place at Kusu-chô, Mie Pref. (Photo by the courtesy of Mr. H. Ohta, May 9, 1971).

すなわち植物体の上部の茎及び花梗などに密に腺毛を有するものがあり、これをケオニノゲシ form. *glandulosus* Beckh. として区別し、これに対して無毛のものをケナシオニノゲシ form. *asper* と呼んでおきたい。因みに、やはり本種が広く帰化している北アメリカにおいても、この両者を同様に区別、記録している。(東京歯科大学)

Summary

Reported in this paper are four additional species of foreign origin, which may eventually become established. The critical identification of these aliens was made while the author was visiting major European and North American herbaria last year, at which time he also made field observations of some weedy species there.

These new records include: 6) *Verbena stricta* Ventenat and 7) *Nicotiana trigonophylla* Dunal of North America; they occur in waste sites of Tokyo.

8) *Arctotheca calendula* (L.) Levyns detected from Mie Prefecture. This South African species is also introduced to Australia and Portugal.

9) *Daucus glochidiatus* (Labill.) Fischer et Meyer of Australia, was found in Mie Prefecture. The last two weeds are assumed to have entered Japan together with wool materials imported to Japan.

10) A cosmopolitan, *Sonchus asper* (L.) Hill is supposed to have reached Japan some 100 years ago. In Japan two forms are seen, viz., f. *asper*, a completely glabrous form, and f. *glandulosus* of which the peduncles and upper stems bear glandular hairs.

□Phạm-Hàng Hô: **An Illustrated Flora of South Vietnam** vol. I, pp. 1115, figs. 1-2787, 1970. vol. II, pp. 1137, figs. 2788-5272, additional figs. 52, 1972. 南ベトナムの植物 5324 種の図説である。菌類 48, 地衣類 12, コケ類 22, シダ類 122, 裸子植物 35, 被子植物 5135 の図と記載, 属や種の検索がのせられている。これらはすべてベトナム語で書かれている。同氏が *Flora of Vietnam* として 1960 年に出版されたものを充実させ完成したのが本書である。図も記載も簡単で細かな所がわからないが, 今まで図の全くなかった種類がかなり図示されている。フランスが残した標本を基礎にして作られているので, Lecomte の *Fl. Indo-Chine* と共に使うと便利である。貴重な本を見せて下さった韓国梨花女子大の李永魯氏に感謝します。

(山崎 敬)

○バイカル湖産のジュズマリモ (小林義雄) Yosio KOBAYASI: *Sphaeronostoc pruniforme* (Ag.) Elenk., collected in Baikal Lake

1975 年 7 月 23 日, イルクーツクから日帰りでバイカル湖見物に出かける。同行は前川君, インツーリストの若い婦人が案内役である。アンガラ河の右岸に沿って東南に走る 72 キロの道路はよく舗装され, 欧州シラカバ, 欧州アカマツ, シベリヤカラマツなどに蔽われた低い山みが続き, それらの間には湿地も見られ, 農牧を業とする 2~3 の部落も望まれた。1 時間余のドライブの後, 河口 (河の入口) のリストビアンカ (カラマツ林の意) 村に着き, 太洋の如く拡る湖に接することが出来た。幸に波静かで, 対岸の山々は模糊として霧に包まれている。湖岸に山がせまり, 斜面にはカラマツなどの疎林があり案外に明るい風景であった。インツーリストのスケジュールの下では自由行動はゆるされず, 湖岸のレストラン “バイカル” で食慾の有無に拘らず昼食をさせられ, 次いで博物館を見物し, 湖岸を少々散策して帰途につくという寸法らしい。前川君は不平たらたらであったが, インツーリストのベルトコンベヤーに載せられたからには, その範囲内で有効に時を過すべきと考え, レストランで注文せぬに出されたオムリー (鮭鱒類でオムールと発音するのが正しいらしい) の薄塩にした切身